

Title	滿洲でオーローラ見ゆ
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1929), 9(97): 246-247
Issue Date	1929-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/161398">http://hdl.handle.net/2433/161398</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 満洲でオーローラ見ゆ

諏訪の三澤氏から送られたハルビン日日新聞の十一月22日のに下の記事があつた。

### 黒河に極光現はる

#### 天空の現象として珍らし

(帝通黒河特信)黒河附近に珍らしい天空の二現象が起つた其の一は北極光の出現で十月十八日晚七時頃より半時間、十時半より十一時までの二回對岸露嶺の北方、天空大半に亘つて一面の赤色に化し其の間數條の薄墨色の極光かサーチライトの如く立ち、極光に包まれた無數の星は黄金色の燦爛たる光を放ち非常の壯觀であつたが、此の地方で北極光を認めたのは今回が初めてである。

其の二は十一月九日午後一時四十分頃のこゝで、晴天の太陽を中心として 西、南、北の三方の天七割に跨り、明暗十個の錯綜した大きい虹が出現した。三つの圓形の虹は太陽を中ひろく取り巻き、其の外には背中あはせの×形した虹が二つ現はれ、薄い虹が五つ現はれた長い白い薄雲が太陽の中央を貫き、虹と薄雲の交叉點は太陽より大きい光を發し、空には六つの太陽が一時に出現したかの感あらしめた此の現象は二時間續き四時十五分に消滅した。此の日は零下九度の寒さで快いまでの晴天であつた。何かの瑞象と市民は語つて居る。

それで、自分は直ぐ同新聞に下の一文を投書した。

### 北滿の同胞に望む

京都帝國大學教授 山本 一清

去る十一月二十二日の哈爾濱日々新聞を見て自分の注意を惹いたことは過ぐる十月十八日の夜に黒河附近でオーローラ(極光)が見えたことである。オーローラの觀えるのは歐米の北部では普通のことであるけれ

ぎ東洋諸國の空に之れが見えるのは稀有の現象である。それだけ、此の種の觀望は學術上にも價值が多い。今後此のオーローラを見られた方は學術研究を援助して下さる意味に於いて、小生まで御知らせ下さるやう御願ひしたい。

オーローラは太陽から放出される電氣粒子の流れが地球の磁極に引きつけられる際上層の空氣中に於いて放電發光するものであるが、此の如き電氣粒子は太陽の黒點活動と密接な關係を有し、黒點の出現が頻繁な時には此のオーローラも見えることが多い。従つて二三年前から太陽黒點の激増と共に世界全般にわたりオーローラが著しく見えて來たことも確かである。殊に今年と明年との二ケ年は太陽黒點の出現度数が頂上に達する時であるから平常オーローラの見えない地方までも珍らしいオーローラ現象が見えて來るころがある。去る十月十八日のオーローラは西洋諸國でも可なり見た人があるやうであるし、日本の北海道でも見たこの報告を受けたが、今度ハルピン日々新聞によつて黒河地方の觀察が報ぜられたのは愉快である。しかし思ふに此の日オーローラが見えたのは決して只黒河地方だけでなく、恐らく北滿一帶からひろく見えたのだらう。只之れを平常見慣れないため注意しなかつた人が社會の大部分では無かつたか？ 折角の珍らしい現象を目前に見てるながら其れを氣付かないのは残念なこゝである。

しかしオーローラは元來薄暮の明るさにも似たものであるから不注意な人々に見逃されるのは何所でも有り勝ちのこゝである。只よく見るに方角が正しい北方即ち北極星の見える方向であること、又、時々赤や青や緑の美しい色に染められたり、光りが全體として不思議に脈動したりするから、ほかの光りと區別するこゝが出来ゐる。とにかく今後此の如き光を北天に見た人は、誰でも、其の時刻、繼續、時間、明るさ、色、線條の有無、脈動の有無、音の有無など、あらゆる觀察事項を報告して頂きたい。見取り圖をかい下されば非常に便利である。寫眞も歡迎する。オーローラは都會の中からは見にくい。なるべく燈火に妨けられない場所が好い、田舎でオーローラを見るのが最も良い(一九二八年一月一八日)